

(案)

子宮頸がん予防ワクチンを接種するお子様の

保護者の方へ



【ご留意ください】

接種後には、お子様の様子をよく見てあげてください。

ワクチンの「意義」と「副反応」の両方を十分に理解してからお子様に接種させてください

意義

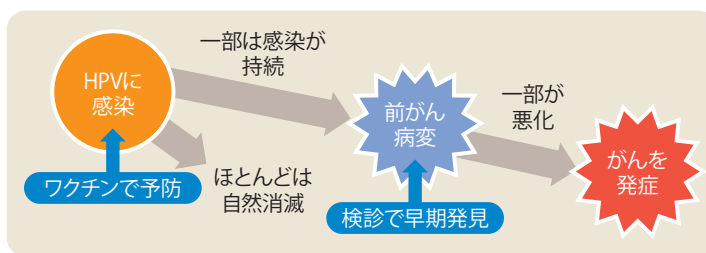
子宮頸がんの主な原因ウイルスの感染を防ぎます

- 子宮頸がんの原因は、性交渉によって感染するヒトパピローマウイルス (HPV) です。そのため、ワクチンを接種してウイルスの感染を防ぐことで、子宮頸がんも予防できると考えられています。

※子宮頸がん予防ワクチンは新しいワクチンのため、子宮頸がんそのものを予防する効果はまだ証明されていません。

- 現在使用されている子宮頸がん予防ワクチンは、子宮頸がんの原因の50~70%¹⁾を占める2つのタイプ (HPV 16型と18型) に感染するのを防ぎます。
- HPVに感染しても多くの場合は自然になくなりますが、感染が続くと、細胞に異常が生じ (前がん病変)、さらにその一部ががんになります。

1) ヒトパピローマウイルス (HPV) ワクチンに関するファクトシート (平成22年7月7日版) 国立感染症研究所



起こる可能性のある副反応

主なものは、接種部位の痛みやはれです²⁾³⁾

- 子宮頸がん予防ワクチン接種後にみられる主な副反応には、接種部位の痛みやはれ、赤みがあります。
- その他、接種部位のかゆみや出血、不快感、また、疲労感や頭痛、腹痛、筋肉や関節の痛み、じんましん、めまいなども報告されています。

まれですが重い副反応も報告されています

- 副反応については、接種との因果関係を問わず、報告を集め、定期的に専門家が分析・評価しています。



▼ これまでに報告のあった重篤な副反応

- アナフィラキシー：呼吸困難、じんましんなどを症状とする重いアレルギー (約74万接種に1回[※])
- ギラン・バレー症候群：手足の力の入りにくさなどを症状とする末梢神経の病気 (約178万接種に1回[※])
- 急性散在性脳脊髄炎 (ADEM)：頭痛、嘔吐、意識の低下などを症状とする脳などの神経の病気 (約222万接種に1回[※])

※副反応の報告頻度：平成26年3月までに報告された症例について、専門家が評価を行い、頻度を計算しています。

2) サーバリックス添付文書 (第7版)
3) ガーダシル添付文書 (第4版)

▼ 痛みやしびれ、動かしにくさ、不随意運動について

- ワクチンを接種した後に、広い範囲に広がる痛みや、手足の動かしにくさ、不随意運動 (動かそうとされていないのに体の一部が勝手に動いてしまうこと) などを中心とする多様な症状が起きたことが報告されています。これらの原因は現在調べているところですが、その報告頻度は5万接種に1回であり、ワクチンを接種した後や、けがの後などに原因不明の痛みが続いたことがある方はこれらの症状が起きる可能性が高いと考えられているため、接種については医師とよく相談してください。

子宮頸がん予防ワクチンは、積極的におすすめすることを一時的にやめています

保護者が気をつけること お子様の様子をよく見てあげてください

当日

医療機関での注意点

失神による転倒に備え、接種後30分ほどは座らせて様子をみてあげてください

- 注射に対する恐怖心などをきっかけに、接種後に失神することがあります。
- 転倒によるけがを防ぐため、接種後30分ほどは、背もたれのあるイスなど体を預けられる場所に座らせて様子をみてあげてください。



接種当日の注意点

激しい運動は避けさせてください

- 接種当日は、激しい運動は避けさせてください。
- 接種部位を清潔にして、体調に変化がないか気をつけて見てあげてください。



気になる症状が現れたとき

すぐに医師にご相談ください

- 注射針を刺した直後から、お子様が強い痛みやしびれを感じた場合は、すぐに医師にお伝えください。
- 接種後、お子様に気になる症状や体調変化が現れたら、すぐに医師にご相談ください。
- 1回目の接種後に気になる症状が現れた場合は、2回目以降の接種を控えることができます。



副反応によって医療機関での治療が必要になったとき

お住まいの市区町村へご相談ください

- 副反応によって、医療機関での治療が必要になったり、生活に支障が出るような障害が残るなどの健康被害が生じたりする場合は、法律に基づく救済が受けられます。お住まいの市区町村の予防接種担当へご相談ください。

注) 救済を受けるには、健康被害が予防接種によって引き起こされたものか別の要因によるものかを、専門家から構成される国の審議会で審議し、認定される必要があります。



数日後
から
数週間後

20歳

お子様が20歳になったとき

ワクチンを接種した方も、
子宮頸がん検診を定期的に受けさせてください

- 子宮頸がん予防ワクチンは、全てのタイプのHPVの感染を予防するものではありません。
- ワクチンで感染を防げないHPVが原因の子宮頸がんを予防するには、子宮頸がん検診を受診して、がんになる前の前がん病変の段階で早期発見する必要があります。
- ワクチンを接種したお子様にも、20歳になったら2年に1回は必ず検診を受けさせてください。



✓ CHECK! 接種前に確認を

- 子宮頸がんは、ワクチン接種により予防できると考えられていることを理解した
- 子宮頸がん予防ワクチンの接種による副反応について理解した
- ワクチンを接種しても、20歳になったら検診も必要であることについて理解した

厚生労働省のホームページでは、子宮頸がん
予防ワクチンに関する情報をご案内しています

厚労省 子宮けいがん

検索

